



沖繩国際大学 平成27年度FD支援プログラム成果報告書

下記内容により、FD支援プログラムの取り組みが完了いたしましたので、「FD支援プログラム成果報告書」にて、ご報告いたします。

報告者氏名	慶田花 英太		所属・職名	産業情報学部企業システム学科 講師
プログラム名称	学外への視察・調査活動等のアクティブラーニングにおけるガイドライン作成の試み			
実施及び成果の 要旨	<p>本調査活動では、講義や演習等で行う学外への視察・調査活動の可能性を検討することや実施する際のガイドライン作成のための資料や課題を抽出するため、新潟県にある佐渡島、新潟経営大学スポーツマネジメント学科の活動（福田拓哉准教授ゼミ）、新潟アルビレックスベーススルクラブ（BC）、新潟県庁を視察・ヒアリングを行った。その後、視察・ヒアリングで得られた資料や課題を整理し、ガイドライン（案）の作成を行った。</p> <p>まず、視察・ヒアリングで得られた資料や課題を整理した結果として抽出された主な課題は以下の5つである。 （主な課題）</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 教員と学生間の目的が共有できていない。 (2) 教員と視察・調査先間の目的が共有できていない。 (3) 学生と視察・調査先間の段取り不足。 (4) 学生の事前学習不足による目的達成度の不足。 (5) 教員と学生間の信頼関係の構築。 <p>次に、上記で抽出した課題を参考に、学外視察・調査実施の際に使用するガイドライン（案）の作成を試みた。ガイドライン（案）は、その目的を学生と共有するための資料として配布できるようなものとした。 ガイドライン（案）の内容としては、「1. 学外への視察・調査を行う目的」「2. 対象」「3. 期間」「4. 視察・調査先の選定方法」「5. 視察・調査活動の流れ」とした。</p> <p>今回の視察・ヒアリングで得られた資料や課題を整理し、ガイドライン作成を試みたが、まだ実証する段階には至っていない。しかし、ガイドライン（案）を作成し、実証することで、これまで以上に教員・学生・視察・調査先間の学習目的の共有は図られるものと考え、その達成度は高くなるものと考えている。そのため、今回の視察・ヒアリングにより得られた課題を参考に学外調査を実施する際のガイドライン（案）を作成することができたことは大きな成果と考える。</p> <p>今後は、ガイドライン（案）を実際に講義で使用し、さらなる内容の検討と具体的な行動マニュアル（案）の作成をしていきたい。また、ガイドライン（案）と行動マニュアル（案）を実証しながら、視察・調査先の企業や団体等と意見交換を行い、修正等を加えていき、より学習効果の高い学外への視察・調査活動に資する教材としたい。</p>			
実施期間	自： 2015 年 6 月 日 至： 2016 年 3 月 日			

※共同実施者（2人以上の場合は、別紙添付のこと）

申請者氏名	平敷 卓		所属・職名	経済学部経済学科 講師
申請者氏名		印	所属・職名	

目 的	本プログラムでは学外への視察・調査活動等のアクティブラーニングに焦点を絞り、学生が自主的・自立的に学外への視察・調査活動等を円滑に行えるようにガイドラインの作成を試みることを目的とする。
活 動 内 容	<p>本プログラムの目的であるガイドライン作成を試みるために、下記の通り、視察・ヒアリングやそれらで得られた課題の整理、ガイドライン（案）の作成を行った。</p> <p>6月～8月 視察先との日程調整、ヒアリング内容の調整</p> <p>9/15～9/18 3泊4日 視察・ヒアリング実施 ※概要は【別添資料1】に示す。</p> <p>(1日目) 9/15 移動日 (2日目) 9/16 佐渡島視察、新潟経営大学（福田拓哉准教授）ヒアリング (3日目) 9/17 新潟県庁訪問、新潟アルビレックスBCヒアリング (4日目) 9/18 移動日</p> <p>10月～12月 視察・ヒアリングで得た資料から課題を整理</p> <p>1月～3月 ガイドライン（案）の作成</p>
成 果・結 果・効 果	<p>今回の視察・ヒアリングにおいて、大学教員・学生・視察・調査先の課題を抽出することができた。主な課題としては下記の5つである。視察・ヒアリングで得られた課題は【別添資料2】に示す。</p> <p>(主な課題)</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 教員と学生間の目的が共有できていない。 (2) 教員と視察・調査先間の目的が共有できていない。 (3) 学生と視察・調査先間の段取り不足。 (4) 学生の事前学習不足による目的達成度の不足。 (5) 教員と学生間の信頼関係の構築。 <p>次に、上記で抽出した課題を参考に、学外視察・調査実施の際に使用するガイドライン（案）の作成を試みた。ガイドライン（案）は、その目的を学生と共有するための資料として配布できるようなものとした。【別添資料3】</p>
今 後 の 展 望	<p>大学におけるアクティブラーニングの一つとして、学外への視察・調査活動に焦点を絞り、そのガイドライン作成を試みた。まだ実証する段階には至っていないが、これまでこのようなガイドラインを作成しないまま実施していたことを振り返ると、今回のガイドラインの効果はあるものとする。特に、教員・学生・視察・調査先間の学習目的が共有されずに、その達成度が十分に図られないことも少なくなかった視察・調査活動においては、このガイドラインによりこれまで以上にその学習目的の達成度は高くなるものとする。そのため、今回の視察・ヒアリングにより得られた課題を参考に学外調査を実施する際のガイドライン（案）を作成することができたことは大きな成果とする。</p> <p>今後は、ガイドライン（案）を実際に講義で使用し、さらなる内容の検討と具体的な行動マニュアル（案）の作成をしていきたい。また、ガイドライン（案）と行動マニュアル（案）を実証しながら、視察・調査先の企業や団体等と意見交換を行い、修正等を加えていき、より学習効果の高い学外への視察・調査活動に資する教材としたい。</p>

【購入図書】

- ・「学生・職員と創る大学教育 大学を変えるFDとSDの新発想」清水亮・橋本勝編著、ナカニシヤ出版
- ・「大学生の学びを育む学習環境のデザイン-新しいパラダイムが拓くアクティブ・ラーニングへの挑戦-」岩崎千晶編著、関西大学出版部
- ・「ラベルワークで進める参画型教育 学び手の発想を活かすアクティブ・ラーニングの理論・方法・実践」林義樹編、ナカニシヤ出版

視察・ヒアリング先の概要

1日目 9月15日(火)	移動日	
2日目 9月16日(水)	佐渡島視察	離島における地域づくり事例(佐渡島トライアスロンを中心としたスポーツ・ツーリズム、棚田保全の取組等)として視察。視察・調査先として候補になることを確認した。
	新潟経営大学 福田拓哉准教授ヒアリング	新潟アルビレックス(サッカーチーム)へ学生をインターンシップとして派遣している。また、観客数増加を目的としてゼミ学生がプロモーションビデオを撮影・制作を行い、実際のホームゲームで放送している等の活動を行っている。 ゼミ学生には、積極的に新潟アルビレックス等のプロスポーツ球団へ視察・調査させ、実践と研究の両方を学ぶ機会を確保している。そのような活動を数年続けてきた結果、教員・学生・球団との信頼関係が構築されてきており、現在は円滑に学生の視察・調査活動が行えている。 さらには、卒業生にはプロスポーツ球団に就職する学生が出てきている。
3日目 9月17日(木)	新潟県庁視察	資料収集。
	新潟アルビレックス ベースボールクラブヒアリング	新潟県内の大学生や専門学生のインターンシップを受け入れ、プロスポーツチームで働く人材の育成を行っている。インターンシップで受け入れる学生に対しては、将来プロスポーツチームで働く意欲のある学生を望むのと同時に、インターンシップ時には球団スタッフと同じように観客と接するように指導している。ただし、積極的にインターンシップを受け入れる想いはあるが、希望する学生は多くないのが現状である。
4日目 9月18日(金)	移動日	

視察・ヒアリングで得られた課題

教員の課題	<ul style="list-style-type: none"> ○学習目的を学生へ伝達していない、または学生と共有できていない。 →学習目的の達成度が達成されない可能性が出てくる。 →お互いの信頼関係が崩れる。 ○視察・調査先との目的が共有されていない。 →教員がどのような目的で学生に対して調査・視察活動を行っているのかを視察・調査先と共有できていないことで、学習目的が達成されない。 ○視察・調査先とお互いの役割を調整していない。 →学生が視察・調査先で教員と企業・団体との関わり方で混乱が生じる可能性がある。 ○学生の自主的な学習を促さず、視察・調査活動が受け身となる。 →視察・調査活動の主体は学生であり、視察・調査先の選定や課題の設定等を自主的に決定できるようにする必要がある。
学生の課題	<ul style="list-style-type: none"> ○学習目的の理解不足。 →学外への視察・調査活動の目的を十分に理解していないため、消極的な姿勢になってしまう。 ○事前学習・調査（講義中、講義外含む）への消極的な態度。 →学習目的の達成度が達成されない可能性が高くなる。 ○視察・調査先との段取り不足。 →視察・調査先へ迷惑をかけ、混乱を招く可能性も出てくる。
視察・調査先の課題	<ul style="list-style-type: none"> ○希望する学生像との不一致。 →視察・調査先としては、将来、その分野に関わる学生を率先して受け入れたいが、現状はそうならない。 ○学生を受け入れるメリット。 →学生の視察・調査活動を受け入れるのは大きな負担となっているため、視察・調査先にとってもメリットが必要。

学外への視察・調査活動におけるガイドライン（案）

1. 学外への視察・調査を行う目的

講義や演習等で学習するだけでは理解することのできない具体的な実践例やアンケートやインタビュー等の調査活動を学外の企業や団体等へ視察・調査に行くことで、講義で学習している内容や課題に対してより専門的に学ぶことができると考え実施しています。その学習効果をより高めるためには学生自身が自ら自主的かつ積極的に視察・調査先の情報を収集したり、アンケートやインタビュー調査の項目を検討したりすることを事前・事後に行うことが必要となってきます。さらに、多くの視察・調査活動ではグループ等の多人数での計画・行動・評価が求められるため、コミュニケーション能力やディスカッション能力も育むことができます。

また、学外の企業や団体等への視察・調査活動を通して、その企業や団体等の仕事内容を理解することができ、人脈を作ることも可能です。そのため、将来の職業選択としても役立つことが期待できます。

2. 対象

○年生 ○名

3. 期間

○○○○年○○月○○日～○○○○年○○月○○日 （○○日間）

4. 視察・調査先の選定方法

- (1) 教員があらかじめ選定
- (2) 学生が選定（個人別、グループ別等）

5. 視察・調査活動の流れ

- (1) 目的の共有（ガイドライン）
- (2) グループ分け
- (3) 視察目的や調査課題の設定
- (4) 視察・調査先の選定、アポイントメント
- (5) 視察内容、調査用紙の作成
- (6) 視察・調査活動
- (7) 得られた資料・結果のまとめ作業
- (8) プレゼンテーション準備・発表